



TITLE:

静脩 Vol. 5 No. 5 (1969.1) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 5 No. 5 (1969.1) [全文]. 静脩 1969, 5(5)

ISSUE DATE:

1969-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65928>

RIGHT:



生涯読書量

苧 阪 良 二

図書館や学部図書室に出入するのは平均して週2回ぐらいだが、一体何のために出入りしたかを反省すると、文献探索と複写のためであって読書のためではなかった。本来読書館であるべきものが私にとって複写館となってしまった。考えればおそろしいことである。やたらに本を読んだ時代、よく買った時代、そして今やよく写しておく時代となってしまった。

らんどく→つんどく→うつしとく。あと10年余（いや今すぐやめたい気もする）、自分にとってどれだけ文献が読めるというのだ。今まで買った本、写した文献全部読めるのか、疑わしい。

学生部々員にさせられた、ある日、大阪の古書展でマルクスの初版本をみてふと思ったことは、資本論を読んでおかねば学生と議論できないだろうと。家にあるドイツ版3冊をひらいた。ドイツ語が眼にしむのでほん訳のほうをみる。5巻、本文だけで約2,900ページある。これでは一年の年期が終るまでに読み切れない。このことから私は自分の商売を思い起こした。私は眼球運動が専門である。大学生レベルで読書速度は秒速10字とみてよいのである。ただし平均的な日本文で。それでは資本論本文だけで最高読書速度で何時間かかるか。推定2,143,509字と出たので、約60時間で読めるということになる。ただしこれは100メートル10秒の飯島選手にナホトカからアムステルダムまで飲まず食わず休まずに走れというようなもので架空の値に等しい。実際は読みつつ考えたり、表を理解したり、註釈を見たりするのだから亜欧徒歩旅行に要する時間よりはるかに長い。ここまで考えてくると、一体資本論を徹底的に読破した人は何人あるのか、だんだん疑問になってきた。もっとも本は全部よまねばだめだと力むようなやばな考えはないが。全36巻のマルクスの全集、まともに全部読むには何もかもおいて10年はかかるだろう。

人生70年、読書年は15才～70才として55年、1日平均5時間読書できるとすると約10万時間。1日1時間とすると2万時間しか本が読めない。平均的な質と量をもった本が3時間～5時間で1冊読めるとすると、多い人で一生涯に33,458冊、少ない人で2,000冊余という計算になる。これは極めて単純な計算だから、実際には多くの変数をそなえた式をたてて、また多種多様の本を分析して推定しなければならないことはいうまでもない。要するに生涯読書量というものを算定して自分の知的生活の方針をきめるべきで、本はいくらでもよめと思うのは錯覚である。少年老い易く学成りがたしである。

過日有名なる東大構内を見学したら落首が目にとまった。教官腐り易く学ひさぎ易し…。原稿書きは日速、平均5枚（読めば3.3分）というところか。書いていると読めない…これ

からあとは賢明なる学生諸賢に語る必要はない。視聴覚情報は1億ビット/秒以上であるが手はせいぜい20ビット/秒以下であることにわれわれは想到しなければならない。

(教育学部教授)

~~~~~ 一言・ふたこと ~~~~~

大学図書館のもっとも重要な使命が、学生にとっても、また研究者にとっても、読みたい本がいつでもすぐ手に入ることであるのは、いまさら言うまでもない。事実、関係者の非常な努力のお陰で、学内の各部局のどこに、どんな図書があるか、総合目録でひと目でわかり、相互閲覧の制度を利用することも可能ではある。

しかしながら、境界領域であるため、あるいは現代の花形というよりはむしろ未来の分野であるため、あるいはまた、きわめて高価であるがゆえに、学内のどこにも購入されていない雑誌や単行本が少なくないのである。各部局の自主性尊重は自明の理にしても、図書の購入が現在のように全くばらばらに行なわれている限り、上のような落とし穴を埋める術はない。一方附属図

書館においては
少ない人員と予算で、かつ

—全学図書協議会の設立を望む—

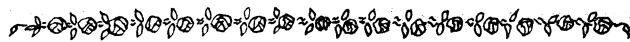
意外な落とし穴を埋めるために

涙ぐましい
ほどのサービス
精神で、活発な
改善を続けてお

られるのであるが、評議会をはじめとする大学の管理機関に対する館長の発言権は無きに等しいときいている。

限られた予算を出来る限り有効に用いるために、全学図書協議会（仮称）を設立し、各部局図書館（筆者の属する理学部には未だないが）から選出された代表者に、附属図書館からの専門委員を加え、各専門分野における第一線の研究者と学生の活動に必須と思われる図書が、学内のどこかに必らず備えられるように、また無意味な重複が避けられるように配慮されることを切に望んでやまない。

(理学部助教授 徳重正信)



われわれ薬学の研究に携わっている者にとって、東端別むねにある学部図書室は小じんまりとしているが何者にも換え難いものである。この活動は学部図書室としての専門分野における独自の機能を十分果している。近年の文献は比較的良く収集されており、ほとんど全ての文献、雑誌、単行本が開架式になっているため、文献、検索、閲覧に非常に便利である。

しかし、なにぶんにも一学部の図書室であるという制限、火災による書物の欠失、かてて加えて昨今の文献の増大、はんらんから不便を感じることも少なくない。巾広い文献の正確かつ迅速なはあく、

供給、専門分野別の
分類、整理、統合さ
らにはこれら膨

—薬学部図書室に望むこと—

今一歩の前進を

大な量にのぼる
図書の保管等に関し
てかなりの試みがな
されてはいるが、今

一歩の前進が望まれる。なおこれらの点については、中央図書館、各学部および研究室の図書室、さらに広く各大学との連係、交換、研究が行なわれることが必要であり、かつ、この意味での再認識を各層に促すことも大切であろう。もっと身近かに、管理、保全のための館員の増員、貸出冊数、開館時間、希望図書購入の扱い方等解決すべき問題は多々ある。学部学生の利用と研究用との間のみぞをどうするかということももっと考慮されてもよいのではないかと思う。最後にさらに薬学の図書室が整備され、発展していくことを期待する。

(薬学部大学院 河谷紘樹)

20年後の本学の蔵書数 550 万冊

最近の図書の増加は著しいものがあるが、この15年間の本学の図書ののび方をみると、昭和27年度より34年度の平均年間増加率は2パーセント台であったが、35年度より42年度は大幅に上昇し、昭和43年3月末の蔵書数は270万冊を突破。最近5カ年間の平均増加率は4パーセント台を記録している。これは昭和41、42年度において、人文科学研究所の特別の受入図書が約12万冊あることにもよるが、それを除いた純増をみても、今後、多少の増減はあるとしても、平均3.4パーセントの増加率でいくものと推定される。推計では本学の蔵書数は20年後の昭和64年3月末には550万台を突破し、そのときの年間増加冊数は18万台（現在の約2倍）になると思われる。これらの図書の管理について改めて考える問題は多いようだ。

一方書庫の収容力は、昭和43年3月現在で16万2千冊の余裕しかもっていない。すでに8部局・研究所等でその収容力の限界をこえている。このように書庫収容力は切迫した現在の問題でもあるのだが、もし書庫スペースがこのままであるとすると、20年後には約280万冊の図書が収容の場所を失ってしまうことになる。将来の図書資料の形態がマイクロ化することも考えられるが、ここ20年の間ではやはり従来の形態が主力をしめるであろう。上記280万冊に対する必要な書庫面積は「国立学校建物の実態調査等に用いる必要面積一覧表」の基準によると閉架書庫で15,700m²となる。今後の本学の研究・教育の推進と密接不離の関係をもちこの膨大な図書資料を充分に収容する書庫建設について真剣に考えていかねばならない。

（注：昭和43年3月末現在 京都大学蔵書冊数2,726,071冊 同書庫面積12,591m²）

資料紹介

参考図書所在目録（和文編）～1968～ 日本私立大学協会編

この目録は全国の私立大学図書館のうち137館において、昭和40年7月現在所蔵している和文参考図書を収録した所在目録である。これは同協会によって、1963年と1964年の2回にわたって出版された「日本参考文献所在目録」（2冊）を礎石として編さんされたもので、人文科学、社会科学、自然科学の3編に大別され、巻末に書名索引がある。各項目内は書名（ゴシック）のアルファベット順配列である。所蔵している大学名は略称によって列記し同一地域間でまとめられている。

現在、財政的にも物理的にも何らかの制約のある各大学図書館で総ての参考資料を収集することは不可能である。そこで相互協力によって、参考図書の所在をはあくし、それを利用することにより、サービス面での機能も発揮できることになる。この意味からしてこの目録が完成されたことは意義が深い。

博士学位論文 内容の要旨および審査の結果の要旨

現在、京都大学 第1集～10集（昭和34～43）、東京大学 昭和38～42年度、大阪大学 第1集～9集（昭和37～43）の論文を所蔵している。本書は学位を授与した年度別に刊行されその内容は学部ごとに集められて、博士番号・論文題目・論文審査員に続き内容、結果の要旨が記載されている。

多くの先人の提出した論文要旨が見られるために今後博士論文を書く上に非常に参考になるものである。

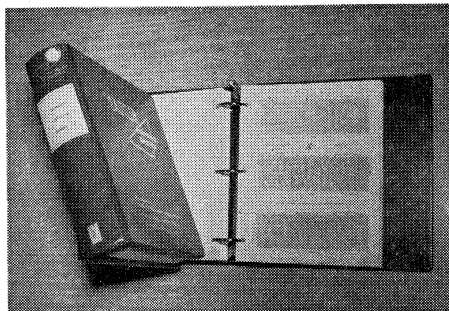
しかしこれは新制博士からの分で旧制博士は京都大学学位録（大正10～昭和26年）があるが学部別に論文名が載っている簡単なものである。

なお、本書は年度別になっているため学位を授与された年度が判明しない時、または特定の人の論文を探すときは京都大学の分は学部別に氏名順のカードがあるのでそれを利用するとよい。

本学の博士論文は本館に所蔵されて、閲覧は出来るが貴重書扱いになっている。

サトラー標準赤外スペクトル集について

Sadtler Standard Spectra, すなわちプリズム分光器による赤外域吸収スペクトル35,000格子分光器によるもの13,000のカードがこのたび図書館に設置されることになった。国立大学では本学がその嚆矢である由である。1968年までの発行分が、各種索引とともに特別戸だに収納され、本学一般の利用に供せられる。専門外のかたに、どのような効用のあるものか説明したいと思う。



吸収スペクトルというのは、その物質がいろいろな波長の光をどういう割合に吸収するかをグラフで示したものである。赤外域、なかでも波長2～15ミクロンにおける吸収スペクトルは、あたかもくしの歯のような複雑な模様を呈している。そしてその模様は物質に個有であって、その物質の“指紋”とみなしてさしつかえない。警察の元締めは膨大な指紋のコレクションをもっていて、事件のたびに犯人の割り出しに役立っているそうであるが、サトラー社の本カード集は全く同じような役割を、物質研究の上で果たしてくれるわけである。

5万に近いスペクトル図をいちいち照合しては時間がかかる。索引はそのため必須不可欠のもので、これをいかにうまく使いこなすかが問題である。近く講習会を開いて利用者の便を計ろうという企てもあるよしである。

近年における革命的な学問の進歩は、科学を細分化するとともに、従来無縁であった学問領域が、いつの間にか非常に密接なかかわりあいをもつ状態をもたらしている。サトラー赤外スペクトルの全学的利用をひとつの機縁として、各部局でバラバラに行なわれていた図書室の活動が物によっては本部図書館中心に集約され、むだがなくて便利なものに変革されるべきではないか。少なくともその方向への第一歩をふみ出す時期のきていることを痛感する。

(工学部工業化学教授 野崎 一)

教 官 文 庫

- 「簿記の一般理論」高寺貞男(経済学部助教授)著 ミネルヴァ書房 昭42.
- 「非線形問題」占部実(数理解析研究所教授)著 共立出版 昭43.
- 「ローマ裁判制度研究」柴田光蔵(法学部助教授)著 世界思想社 昭43.
- 「明治維新の分析視点」上山春平(人文科学研究所教授)著 講談社 昭43.
- 「弁証法の系譜」上山春平(人文科学研究所教授)著 未来社 昭43.
- 「日本経済史読本」堀江保蔵(名誉教授・経)著 東洋経済新報社 昭43.
- 「平和の思想」湯川秀樹(基礎物理学研究所教授)編 雄渾社 昭43.
- 「国際法講義 上」田畑茂二郎(法学部教授)著 有信堂 昭43.
- 「家族法判例集成 追録Ⅲ」太田武男(人文科学研究所助教授)編 昭43.
- 「新修 京都叢書 第5」野間光辰(文学部教授)編 臨川書店 昭43.

図 書 館 だ よ り

ご 存 知 で す か

○ 文献入手の情報の交換——数理解析研究所——

迅速な図書の整理、複写とそして貸出しはサインだけでOKと、だいたい図書館業務の一部が軌道に乗ったところから、次のことをはじめた。

○ 数学関係の Informal Publication 10大学入手リスト 一月刊—

文献情報交換の手始めとして、41年12月から始めたもので、さしあたっては各10大学（北大・東北大・東大・東教大・東工大・名大・京大・阪大・広大・九大）で収集した数学関係の Informal Publication（プレプリント、講義録、テクニカル・レポート、セミナー・レポート等いずれも謄写印刷のもの）を、毎月数研に報告していただき、カード目録を作成して Cumulate する一方、リストを作成して全国140余の研究機関に配布している。近い将来には10大学だけでなく全大学にまで広げる予定。もちろんこれに相互のハード・コピー・サービスがともなっていることはいままでもない。

商業ルートに乗らないため、入手はきわめて困難である。収集には世界各国の研究機関と連絡をとる一方、World Meetings（科学・医学関係の会合予定掲載誌）によって Symposium, Conference, Seminar の予定を知り、必要ならそれらの会合の予稿集をも収集している。また Clearinghouse for Federal Scientific and Technical Information から出ている Fast Announcement 等も Informal Publication 収集のひとつのたてとしてしている。

○ TOSBAC 3400 による数理解析研究所欧文雑誌所蔵目録 一週刊—

図書館業務機械化の第1歩として試みたもので、雑誌の所蔵状態を電算機に記憶させておき、入手状態の変更は毎日おこなう。目録は週1回、ラインプリンターで打ち出している。（所要時間20分）

教官には1人当たり約20種の雑誌のコンテンツ・シート・サービスをしているが、雑誌現物の目次からでなく“カレント・コンテンツ”という目次ばかりを集めた雑誌から目次を写しとっているので、（現物到着より約2ヶ月位早い）コンテンツ・シートが各人にとどいても、雑誌そのものは未着である。このため、雑誌の所蔵状態を通知するため、各人の当該誌のみを選択して目録を打ち出したり、交換、購入等の入手別、また購入誌の場合は書店別に分けて打ち出す等して、サービスの向上と、業務の機械化をはかっている。（雑誌種類数約500）

次には Informal Publication, 雑誌, 図書の順序で文献検索のサービスを開始したいと計画している。

○ 学術雑誌総合目録—自然科学・和文編1968年版—の活用を

——文献の相互利用・資料の迅速な探索に——

1966年に刊行された学術雑誌総合目録自然科学・欧文編, 1967年の人文科学・欧文編に続いて、このたび自然科学・和文編が刊行され備え付けられた。この総合目録は文部省が、わが国の全国的な文献の相互利用, 相互協力の振興に資するため作成したもので、国内の各大学, 研究所, 国立国会図書館, 研究機関（官公庁, 民間会社）等における自然科学関係の和文学術雑誌について所蔵状況を調査し、編さんしたものである。国内のすべての資料を迅速に探索し、利用するためにこの目録を大いに活用して下さい。



理学部・植物学教室図書室

理学部には、学部総合の図書室は無く、各教室ごとに図書室を持っている。その一つ、約50年の歴史を持つこの図書室は、規模も小さく、立派な設備もないが、植物分類学に関する書物の中には、貴重なものがそろっている。それは、第一次世界大戦の後、敗戦で困っていたドイツの学者がヨーロッパの古典の、手に入り難いものをたくさん手離した際に購入したから、と聞きおよぶ。ヒマラヤ関係の図書も相当そろっていて学術探検隊のお役に立った事もしばしばである。

蔵書数は約1万3千冊余（購入外国雑誌は約30種）、すべて開架式、教室員は各自、自由に利用できることになっているが閲覧室が狭い故に図書室内での閲覧よりも複写のため借出すほうが多いようである。学外からの利用者も相当数あって、日本でここだけしかないという文献を、はるばる遠方から見に来られるかたもある。

いづこも同じ人手不足でほとんど閉室状態であったが、数年前から定員外の図書係が1人常勤して、司書としての務めを、別けても Referencer としての奉仕を少しでもよくしたいものと心がけている。これまでなかった書名カードの作成を終り、これからは件名カードを、できうる限り展開させて、多く作りたいものと念願している。

あとがき 今月も示唆に富んだ立派な原稿を多数、御寄稿いただき、遅ればせながら26号を皆様のお手元にお届けすることができました。

巻頭言では、一人の人間の生涯読書量が科学的な裏づけをもって述べられており、限られた読書量の範囲で、いかに有効な読書計画をたてるべきかを、学生諸君に説いておられます。有効な読書は、資料の有効な活用の中からしか生まれません。その意味でも、“一言・ふたこと”欄にも述べられている図書に関する全学的な協力体制が一日も早く整えられることを新しい年の始めにあたって願わずにはおられません。

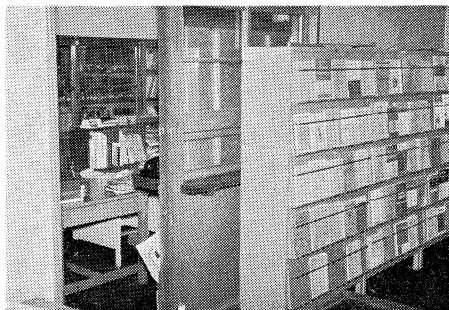
理学部・動物学教室

動物学教室の図書室は教室の裏側、植物学教室との境にある。大正8年教室発足と同時の創設で、蔵書数は約1万冊、中には稀覯本もあり、わが国では当教室だけという雑誌も多い。Siebold; Fauna Japonica (I—IV) はとくに有名で、世界的な価値をもち、貴重書展には必ず展覧される。図書館文献複写係を通じての雑誌の複写依頼も非常に多い。年間予算は現在約200万円、他に数10種ほど寄贈の雑誌・研究所報告等もある。

図書室は発足当時のままなので、書庫の余裕が全くなく、ふつうの部屋を書庫に転用し、それでも足りなく積み上げてある本もある。

職員は1名、図書事務一般、複写その他の雑用を処理しているが時間が足りず、どうしてもサービスに欠けることが出て来る。特に閲覧時間延長の希望が多いがその要求に応じられず悩んでいる。

最近、植物学教室図書室との境のドアが開かれて両方から利用できるようになった。将来、動植教室図書室の合併が実現するようになれば職員も複数になり、利用者へのサービスもよりよくできるものと思われる。



動物学教室図書室

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 5, No.5 (通号26号) 1969年1月15日発行・編集発行人：岩倉敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表771-8111 (内線) 2220-2238